インタヴュー＋編集

猪瀬直樹

inose naoki

ノンフィクション宣言

沢木耕太郎　青木　[illegible]　関川夏央　吉岡　[illegible]　山根一眞　[illegible]

文春文庫

文春文庫

ノンフィクション宣言

定価はカバーに
表示してあります

1992年5月10日　第1刷

編著者　猪瀬直樹
発行者　豊田健次
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-743103-3

文春文庫

ノンフィクション宣言

猪瀬直樹編著

文藝春秋

ノンフィクション宣言

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

足立倫行篇
9 耳かき曲線
「エッセイ」
五月のシルエット
「三年後のエッセイ」
消えたシャクナゲの秘密

山根一眞篇
39 変体ジムショ術
「エッセイ」
二百円秘書の仕事能力
「三年後のエッセイ」
ジャーナリズムと「技術の力」

吉岡忍篇
71 黄昏時の頭痛
「エッセイ」
一年分のエスプリ
「三年後のエッセイ」
M君はどこへ行った

関川夏央篇
105 路傍の石と意思
「エッセイ」
さびしいひとびと
「三年後のエッセイ」
「ここ数年、なにかいいことありましたか」

青木冨貴子篇
137 感嘆ニューヨーク
「エッセイ」
『裸の街』ニューヨークから
「三年後のエッセイ」
ベトナム帰還兵からの招待状

沢木耕太郎篇
165 アマチュア往来
「エッセイ」
孤寒
「三年後のエッセイ」
日記から

猪瀬直樹篇
215 ボクとキミの二十歳
「エッセイ」
夢の証し
「三年後のエッセイ」
青い山脈

242 あとがき

245 三年後のあとがき〈全共闘世代の「ストイシズム」について〉

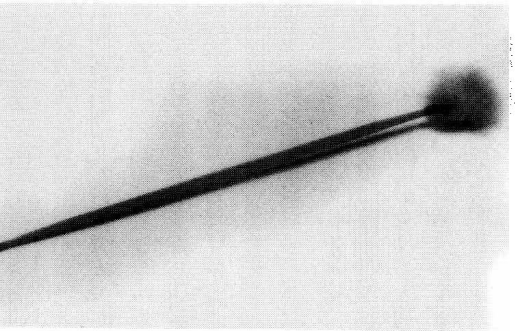
装幀　プラスアイ（堀三津子）
本文写真　梶洋哉

ノンフィクション宣言

○いつから耳かきが好きになったのかな。

●やっぱり原稿を書く生活になってからだね。右手で鉛筆持って、左手で耳かき持ってる。女房も子供もみんな寝静まっている真夜中、机に向かって耳かきクルクルやってると、構想が固まってきたりすることがあるんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong



あだち・のりゆき　一九四八年三月二十五日鳥取県生まれ。小学四年以後、自衛官の父の転勤にともない日本各地を転々とする。早稲田大学政治経済学部を一年休学して、アメリカ・北欧生活を体験。大学に戻ったものの中退し、映画制作にかかわり、七〇年秋から二年間世界放浪の旅に出る。その後「平凡パンチ」の取材記者を経てフリーランスに。著書に『人、旅に暮らす』（八一年、日本交通公社出版事業局。新潮文庫）、『日本海のイカ』（八五年、情報センター出版局。新潮文庫）、『一九七〇年の漂泊』（八六年、文藝春秋。文春文庫）、『人、夢に暮らす』（八八年、双葉社。新潮文庫）、『北里大学病院24時』（八九年、新潮社）、『アジアの人波、海の道』（九〇年、文藝春秋）、『錦の休日』（九一年、ＰＨＰ研究所）など。同時代人の喜怒哀楽をさまざまな手法で描き続けている。

竹カンケイの感触

○いつから耳かきが好きになったのかな。
●やっぱり原稿を書く生活になってからだね。右手で鉛筆持って、左手で耳かき持ってる。
○一応かたいほうを耳に入れるわけ？
●そうだよ、白いホワホワのほうは気持ち悪い。粉がくっついてると厭なんだよね。
○僕なんか子供のころの床屋さんの棚を連想するな。だけどそうそう耳垢もたまらないでしょう。
●たまらない。でも必要。テレビのロケで一週間北海道に行ったの。耳かき忘れて出かけちゃってさ、往生したよ。
編集者　ないとダメなんですか。
●竹製が一番いいですね。プラスチックとかいろいろあるけども、竹が一番。
○プラスチックは確かにだめだな。僕も竹を持ってる。だけどたまに使うだけで、そう……。
●息子がまねしてね、宿題やりながらクルクルやってる。
○変な親子だな。
梶カメラマン　たばこが少なくなりますか。
●うん。
○なになに（と身を乗り出して）。だけどあまり応用できる話じゃないな。どのぐらいやってる？
●もうここ四、五年は愛用してるけどね。
○愛を求める孤独な青少年がさ、何か……。
●女房も子供もみんな寝静まっている真夜中、机に向かって耳かきクルクルやってると、構想が固まってきたりすることがあるんだ。
○フランスに耳かきがないの知ってる？

●知らなかった、そんなの。
○パリに十年住んでるやつが、そう言っていた。
●どうするわけ？
○綿棒らしい。連中、〝掘る〟という微妙でしんぼう強い行為に耐えられないんじゃないか。それとも肌の湿気が違うのかもしれない。
●アメリカにはあるんだよ。トラベル・キットっていうのにかみそりやつめ切りといっしょに全部入ってる。竹じゃなくて金属性だけど。
○端にホワホワがついてるのは日本だけかな。
●竹のなんともいえないやさしさが大事なのよ。このやさしさが欲しかったの。

本質はトリヴィアルなところに

○いまみたいなトリヴィアルな話題って意外な収穫がもたらされるんだよね。足立倫行と耳かきのカンケイからその日常がほの視える……。ノンフィクションという方法のおもしろさでね。さて本論に入ろうか、と言いつつまたまたディテールを追求したりして。原稿書くときのツールはなに？
●鉛筆。全部2B。
○僕も鉛筆だったけど、しまいには6Bになってその先がない。それでワープロにした。
●鉛筆は古いかなあ。
○プライベートなことであれだけれども、ご家庭のスペースはどのぐらいでございますかね。
●二間しかないんだ。六畳と八畳。八畳のほうは居間兼寝室兼書斎兼、全部。

○家族は？
●子供は別の小さい部屋に二人寝起きしている。
○『一九七〇年の漂泊』によるとお父さんは自衛官だったそうで。官舎が二間しかなかったとか。
●それ以来二間暮らしが続いてるんです。いまはおやじも家を建てたけれど。その隣の敷地がたまたま空いていた。そこに小さな借家があったので隣同士で住んでいるんです。
○ノンフィクションの場合は書庫や資料置き場が必要になるけど、二間じゃ困るでしょ。
●隣のおやじの土地に物置をつくって全部そこにつっこんであるんだ。
○原稿を書いている部屋で奥さんが寝ているの？
●うん。
○そうすると、夜中に原稿書いていては明るくて眠れないんじゃないかなあ。
●女房、暗くすると寝れない。そういう特異体質の女房もらわないとね。
○電気はともかく、たばこを吸うだろ。
●そうそう。
○あれ横で呼吸している人もかなり害悪があるらしい。本にそう書いてあった。昔、自宅で原稿書いていたころ、子供がゴホンゴホンと咳をする。煙が部屋中に充満してるわけでしょう。これはやっぱりまずいなと思ったね。以来僕は都心の仕事場暮らしが十年近く続いているんだ。あなたはその対策をどうしてるのかな。
●だからそのために開けてるの、窓。
○冬もか。
●うん。

○奥さん寒くないのか。
●あいつ、布団二倍ぐらいかけて、俺はふるえながら、空気が入れかわるの待っている。
○それもおもしろいな。
●おもしろくないよ。

過去を回想する方法

○『一九七〇年の漂泊』は自伝ノンフィクションの傑作だと思うんだけど、あなたは「早すぎた自伝」というタイトルで『新潮45』（昭和62年2月号）にエッセイを書いていますね。「密着しインタヴューをし分析する対象が他人から自分自身に変わるだけ」のつもりだったがそれは「とんでもない思い違い」で、なかなか書けなかったと。
●どうしてもこの作品を書いておかないと前に進めない気がしたんです。他人の人生の細部にまで分け入って公表する以上、自分自身にもある種の姿勢で臨むべきだと思った。
○ここに登場する「僕」は倫行さんだけれども、これが倫行さんでなく他の人間でも自分のことのように共感できる。この作品がすぐれているのは、大人になってからのわざとらしい解釈がないところだ。ディテールはどうやって再現したのか訊きたい。
●日記をつけていたんだ。かなり克明に。まあ二十代の若者の日記なんて極端な自惚れと過度の自己嫌悪に満ち満ちていてとても読めたものではありませんよ。ただ映画青年だったからわりとシーンを書いてあった。シナリオの練習みたいにね。
○うん。小説とノンフィクションの違いは

そこだね。シーンだと乾いている。それにディテールが描けているし。私小説ってのはやたらにベタベタしているよな。心情吐露ばっかりで。

●シーンのなかだったらことさら美化したり卑下したりすることなく自分の姿を距離をもって眺められるような気がしたんだ。まあ恥ずかしいことだけどドキュメンタリー映画の監督になって僕自身を撮ってみようと思ったの。

○三角カンケイとかそういうシーン、これも実体験なのに読むほうに覗き趣味の卑しい気持ちを起こさせない。そこがいいですね。

倫行inヨコスカ

○さて、作品に即して。鳥取の境港から横須賀に出てきたのは小学校四年生。横須賀というのがあなたの異文化体験にとって運命的だったね。海で溺れそうになってガイジンに助けられたりする……。

●モーターボートにGIと女の子が乗っていたんだよね、明らかにパンパンの人なんだけども。

○アベックなんて言葉、もう使わなくなったなあ。

●そうだね。海辺に「国際ホテル」というのがあって、そこの周りに行くと、コンドームがプカプカ浮いているという状況があったわけ。友人と僕とで遠くに見える島へ泳ぎに行こうって。

○四年生のときの体験？

●中学一年。波があったの、かなり。行けるかどうかわからなかったけどまあ行ってみようやって。帰りに力尽きちゃって。だめかなと思ったときに忽然とモーター

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong